

忘れえぬ人は必ずしも忘れて叶うまじき人にあらず

国木田独歩『忘れえぬ人々』

『婦人画報』の創刊者であり、編集者としての手腕も評価された国木田独歩の1898年(明治31)4月『国民之友』に発表された短編小説。溝口(現、川崎市)の旅館亀屋で、無名の文士・大津弁二郎がたまたま泊まりあわせた画家の卵・秋山松之助に物語る形式となっている。大津には親兄弟や先生と違って忘れても義理を欠くわけでもないのに、妙に忘れられない何人かの人々がいる。一人目は、十九歳の春、瀬戸内海を渡る汽船の甲板から見た寂しげな小島、そこで小さな磯を漁る漁夫と思しき男二人は、二十二、三歳の正月、九州阿蘇山の麓で見た馬子。三人目は、夏の初め、四国の三津が浜で見た琵琶僧。「忘れえぬ人は必ずしも忘れて叶うまじき人にあらず」の句から始まる原稿、二年後に書き加えた人物は……

(Amazon「本の紹介」より転載)

あれは確か就職して間もない頃だった。函館に帰省する時の話だ。僕の指定席に座ろうとすると、小さな女の子が座っていた。隣に座っていた若い母親がその子を膝に乗せ「すみません」と頭を下げた。僕もつられて「すみません」と頭を下げた。

女の子はしばらくするとお母さんの膝の上で黙っていることに耐えられなくなったみたいで、体を伸ばしてむずかるようになってしまった。母親は女の子のリュックからおやつを出して「食べていいよ」とつぶやくように言った。ようやく落ち着いてきたところで僕に「すみません」とまた頭を下げた。気を遣わせてしまったようで逆に申し訳なく思った僕は「どちらまでですか」と尋ねた。

「函館までなんです。」

「僕もです。でもまだ長くかかりますから、お子さんには飽きるかもしれませんね。大変ですね。」と返すと、少し間をおいて

「実は、父が倒れたんです。それで…」

母親はそう言い、女の子の相手をしながら、聞くともなく自分の身の上話を始めた。

「父とはどちらかという疎遠だったんです。高校生の時からあまり話をしないようになって。高校を卒業して家を出て、結婚して札幌に住んでからはなおのこと。父親もあまり口数が多い方ではないから。でも、こうして倒れたと聞くと、なぜ今まできちんと話をしてこなかったのかな、なんて思うんです。」

僕はただ聞くことしかできなかった。気の利いたことは言えそうになかった。

「ごめんなさい、こんな話を聞かせて。でも、こうして函館に向かっているうちに父がどうにかなったらと思うと不安でどうしようもないんです。」と震える声で言った。携帯電話などない時代の話だ。

ホームに降りたとき、母親は小さく頭を下げて女の子の手を引っ張り足早に改札に向かっていった。女の子は二度三度僕の方を振り返ったが、母親は振り返らなかった。

ただこれだけの話である。でもなぜか僕の記憶から離れない“忘れえぬ人”だ。

これを読んで、志賀直哉『網走まで』を連想する人がいるかもしれない。確かにシチュエーションは『網走まで』に近いが、僕にとっては函館駅のホームと母子の後ろ姿をひっくり返した忘れられない光景なので、こちらをとった。

若かりし頃の僕はかなりの自意識過剰で、旅行の際には隣に座った人に何も声をかけないのが失礼にあたるような気がして「どちらまで」と声をかけることが多かった。ある時、いつものように声を掛けたら相手にびっくりされた。その時、はじめて自分の失敗に気がついた。飛行機だった。そりゃ、途中下車はないわな。

